

# 男子体操競技情報 22 号

(公財) 日本体操協会

リオデジャネイロオリンピック男子体操競技強化本部

審判委員会男子体操競技審判本部

## 【目 次】

1	はじめに	1
2	第 17 回アジア競技大会報告	2
3	第 45 回世界体操競技選手権南寧大会報告	4
4	平成 26 年度国内競技大会総括	11
5	2013 年版採点規則正誤表	13
6	2015 年度採点指針	14
7	難度認定及び演技実施の確認事項と FIG 通達	15
8	2015 年度国内内規	29
9	おわりに	30

## 1. はじめに

リオデジャネイロオリンピック男子体操競技強化本部  
男子体操競技強化本部長 水鳥 寿思

2014 年は、世界選手権個人総合で内村航平選手が前人未到の 5 連覇を達成し、その強さを世界に証明することができました。また、アジア競技大会においても、史上初の団体優勝をはじめ、40 年ぶりの日本勢個人総合優勝など、日本の活躍が目立った一年となりました。これも日本の美しい体操が高く評価された結果であると認識しています。しかし、最大の目標であった世界選手権での団体優勝は、ライバル中国に 0.1 という僅差で惜しくも敗れてしまいました。過去 10 年間で最も中国に接近することができましたが、あと一步及びませんでした。すでに中国と同等の力を持っているとも言えますが、絶対に負けられないという気持ちの差が勝敗を分けたのではないかと感じています。D スコアに目を向けると、決して世界をリードしている状況とは言えず、団体予選では中国に 4.4 差、団体決勝では中国に 2.8 差、3 位のアメリカにも 0.2 差で負けていました。また、個人総合においても内村選手を凌ぐ選手が数名現れており、数年前に比べて世界のレベルは飛躍的に向上しています。リオデジャネイロオリンピックにおいて金メダルを獲得するためには D スコアの向上が絶対的な条件です。「美しい体操」だけでは勝てなかった事実を真摯に受け止め、これからは、「美しく、そして強い体操」をアピールすべく、選手の皆さんは D スコアアップと安定した演技実施を目標に日々の練習に励み、関係者の皆様方には、選手の育成・強化を推し進めていただかなければなりません。

強化本部では来年に迫っているリオデジャネイロオリンピックに向けて、団体総合・個人総合において常に世界の頂点を目指し、代表となった選手の得意種目においてはメダル獲得を目指して努力していかなければなりません。そのためには全国の皆様方との更なる連携が必要であり、共に歩み、強化を進めていきたいと考え、情報 22 号を通達させていただきます。

## 2. 第17回アジア競技大会報告

審判委員会男子体操競技審判本部

島田 利夫

高橋 孝徳

森 直樹

1. 派遣期間：2014年9月18日(木)～26日(金)
2. 開催地：大韓民国 仁川
3. 会場：Namdong Gymnasium
4. 審判員：島田 利夫 (男子体操競技審判本部副本部長)  
高橋 孝徳 (男子体操競技審判本部本部長)  
森 直樹 (男子体操競技審判本部本部長)
5. 日程：

9月	19日	(木)	男子審判会議、男子ポディウムトレーニング
	20日	(金)	女子ポディウムトレーニング
	21日	(土)	男子団体決勝、個人予選
	22日	(日)	女子団体決勝、個人予選
	23日	(月)	男女個人総合決勝
	24日	(火)	種目別決勝 男子 Fx、PH、SR 女子 VT、UB
	25日	(水)	種目別決勝 男子 VT、PB、HB 女子 BB、Fx

6. 参加国：22カ国 (団体13カ国) 個人84名

7. 審判団：

Superior Jury Steve BUTCHER FIG 男子技術委員長

Zhongyi MIAO AGU 男子技術委員

森 直樹 あん馬 D1 (全競技を通じて)

島田利夫 つり輪 E2 (団体決勝)

つり輪 R1 (個人総合決勝)

高橋孝徳 鉄 棒 E4 (団体決勝)

跳 馬 E2 (個人総合決勝)

団体決勝、個人総合は E 審判 4 審制で R 審判 (リファレンス) を採用

種目別決勝は、Supervisor と E 審判 5 審制、R 審判を採用

8. 会議報告

男子ポディウムトレーニングに先立って審判会議が行われたが、この日は、団体決勝と個人総合決勝の審判抽選のみが行われた。エジプトの R 審判がキャンセルしたため、団体決勝では中国が、個人総合決勝では日本が 1 名 R 審判に入ることとなった。

団体決勝当日の打ち合わせの際、FIG 男子技術委員長 Steve BUTCHER 氏によるニュースレター27の内容に基づいた講習が行われた。以下、主な内容の抜粋。

ゆ か：タンブリングにおける着地後に脚を閉じない減点についての説明。着地後こぶし一つ分程度の脚開きであっても脚を閉じずに次の動きに繋げた場合は減点の対象となっていた。着地後に両足を同時に閉じてから次の動きに繋げたものは減点がなかった。

あん馬：交差技の前後の片足振動の大きさの減点についての説明。頭ぐらいまで足が上がっているものには減点していなかったが、馬体すれすれの実施には 0.30 の減点がなされていた。

つり輪：逆懸垂での停滞 2 秒に対し -0.10 がなされていた。

跳馬：入りの脚開きと膝のまがり、第2空中局面でのつま先、着地準備、着地姿勢の高さについての減点の説明があった。

平行棒：わずかな手の握りかえについて毎回0.1の減点がなされる。

鉄棒：ひねって大逆手になる技は45°を超えた逸脱はルール通り0.30の減点がなされる。  
アドラーでは30°を超えた逸脱に対して0.30の減点と説明があった。車輪の際の抜きでの膝まがりについても減点の対象となる。

## 9. 結果

### □ 団体決勝

順	国名	ゆか	あん馬	つり輪	跳馬	平行棒	鉄棒	合計
1	日本	59.750	59.250	59.250	59.350	59.925	57.950	355.475
2	韓国	58.325	58.325	57.975	59.600	60.150	56.500	350.875
3	中国	59.750	56.150	58.875	58.500	59.400	57.625	350.300

### □ 個人予選

神本 雄也 個人総合1位 ゆか 4位 つり輪 8位 平行棒 1位  
 山本 雅賢 個人総合2位 あん馬 5位 鉄棒 3位  
 齊藤 優佑 個人総合3位 つり輪 10位 鉄棒 4位  
 白井勝太郎 ゆか 1位 跳馬 5位  
 武田 一志 つり輪 4位  
 長谷川智将 あん馬 1位

### □ 個人総合

順	選手	国名	ゆか	あん馬	つり輪	跳馬	平行棒	鉄棒	合計
1	神本 雄也	日本	15.000	13.400	14.900	14.750	15.500	14.400	87.950
2	山本 雅賢	日本	14.100	14.900	14.600	14.850	14.600	14.450	87.500
3	Lee Sangwook	韓国	14.850	14.150	14.200	14.400	14.850	14.750	87.200
4	Huang Yuguo	中国	14.850	13.700	14.600	14.450	15.450	13.450	86.500
5	Yang Shengchao	中国	13.650	13.100	14.650	13.350	14.375	14.800	83.925
6	LeeChih Kai	TPE	14.150	14.375	13.700	13.550	13.750	13.350	82.875

### □ 種目別決勝

ゆか 神本 雄也 3位 14.933 D: 6.0 E: 8.933  
 白井勝太郎 5位 14.800 D: 6.6 E: 8.200  
 あん馬 山本 雅賢 1位 15.033 D: 6.0 E: 9.033  
 長谷川智将 5位 14.233 D: 6.7 E: 7.533  
 つり輪 武田 一志 2位 15.100 D: 6.5 E: 8.600  
 齊藤 優佑 4位 14.866 D: 6.2 E: 8.666  
 跳馬 白井勝太郎 7位 13.687 13.641 D: 5.6 E: 8.341 L: -0.3  
 13.733 D: 5.6 E: 8.133  
 平行棒 神本 雄也 1位 15.800 D: 6.9 E: 8.900  
 鉄棒 齊藤 優佑 2位 15.533 D: 7.0 E: 8.533  
 山本 雅賢 3位 15.491 D: 6.9 E: 8.591

## 10. 所感:

大会運営について、今大会では、事前の情報が乏しく、ポディウムトレーニングの時間、宿泊先などは、それぞれが各自のルートで入手する状況であった。受付などの運営はボランティアスタッフ

が務めていたが、各競技に精通した者が関わっておらず、情報が二転三転するなど混乱が幾度となく見受けられた。競技会場でも同様の状況であり、不備も散見された。それでも、解らないなりにボランティアスタッフが懸命に務めることにより、後半は徐々に運営が軌道に乗ってきた感じであった。施設は新しくきれいであったが、表記がハングル文字のみの箇所が幾つもあり、利用に少々手間取った。

使用された器械は、SPIETH 社製。跳馬の跳躍板が 3-3-2 と 2-1-2 の 2 種類のみで、硬いか柔らかいかのみ、平行棒ではバーが山なりで幾分中央が広がっている状態であった。

今回、アジア大会では初めてリファレンス審判制が導入された。R 審判と E 審判にアジア地区以外から複数の審判員が招集された。アジア大会にアジア人以外の審判を呼ぶことに対して反対の意思を示す審判員も存在したが、公平さが保たれた採点がなされていたように感じられた。

団体決勝は、3 班編成で行われた。中国は 2 班、日本と韓国は 3 班で、ポディウムトレーニングの様子からもメダル争いは日本、中国、韓国の順位争いになることが予想された。中国は Zou Kai 選手以外は若手メンバーで 1 種目めの平行棒から大過失が連続し苦しいスタートであった。その後も鉄棒やあん馬で落下が続き、大過失を含む演技が 5 つあった。また、空中姿勢の乱れや姿勢欠点が目立ち全体的に強さを感じられなかった。

3 班目は日本と韓国が登場し、韓国への大声援の中、日本と韓国の演技に注目が集まった。

日本はゆかをノーミスでスタートしあん馬、つり輪、跳馬まで順調に得点を伸ばした。後半の平行棒と鉄棒で大過失が出てしまったが、逃げ切ることが出来た。韓国は、地元の大声援の中、難度は高くないが必死の演技で得点を重ね中国にわずかながら勝ち越す結果となった。個人総合では神本雄也選手が、あん馬と跳馬で中欠点があったが、他の種目は安定した演技実施で優勝した。山本雅賢選手はゆかで手をつく過失があったが、あん馬、つり輪、跳馬で得点を稼ぎ 2 位になった。種目別では、跳馬以外の 5 種目でメダルを獲得し、終わってみれば日本の圧勝、金 4 個、銀 3 個、銅 2 個というすばらしい結果で終了した。

今回、日本チームは打倒中国、団体金メダル獲得を目標に掲げ、チーム一丸となって試合に臨んだ。今までアジア大会においては常に中国の後塵を拝する位置に甘んじており、日本は勝てないという負の連鎖を拭い取る素晴らしい活躍であった。評価は D・E スコアともにニュートラルな採点であり、日本の美しい演技が評価された印象であった。

本大会では試合スケジュールや運営等で多少トラブルにも見舞われたが、選手は気にすることなく実力を発揮してくれた。当初の目標を達成できた日本チームには心から賞賛の意を表したい。そして慢心することなくこの王座を守ってほしいと願うばかりである。

最後に、大会運営に対し準備が万全でなく困惑することもあったが、韓国体操協会審判委員会委員長の南勝久氏が多くのサポートをしていただいたことに感謝の意を表したい。

### 3. 第 45 回世界体操競技選手権南寧大会報告

審判委員会男子体操競技審判本部

後藤 洋一

倉島 貴司

1. 派遣期間：2014 年 9 月 27 日(土)～10 月 12 日(日)
2. 開催地：中華人民共和国 南寧
3. 会場：Guangxi Sports Center
4. 審判員：竹内 輝明 (審判委員会委員長)  
後藤 洋一 (男子体操競技審判本部本部長)  
倉島 貴司 (男子体操競技審判本部副本部長)
5. 日程：

9月	27日	(土)	男子 FIG 技術委員・D 審判会議
	28日	(日)	男子審判会議・抽選
	29日	(月)	男子ポディウムトレーニング
	30日	(火)	男子ポディウムトレーニング
10月	1日	(水)	女子ポディウムトレーニング
	2日	(木)	女子ポディウムトレーニング
	3日	(金)	男子予選
	4日	(土)	男子予選
	5日	(日)	女子予選
	6日	(月)	女子予選
	7日	(火)	男子団体決勝
	8日	(水)	女子団体決勝
	9日	(木)	男子個人総合決勝
	10日	(金)	女子個人総合決勝
	11日	(土)	種目別決勝 男子 Fx、PH、SR 女子 VT、UB
	12日	(日)	種目別決勝 男子 VT、PB、HB 女子 BB、Fx

6. 参加国：68カ国（計618名 男子342名 女子276名）

7. 審判団：

◆ D 審判団

Fx	D1：CORBITT Jonathan(USA)	D2：VUKOJA Mario(CRO)
PH	D1：竹内 輝明(日本)	D2：CARRILES Pablo(ESP)
SR	D1：SOUSA Alvaro(POR)	D2：TOMBS Andrew(GBR)
VT	D1：DEJANOVIC Dejan(SRB)	D2：HADJI Mohamed Smail(ALG)
PB	D1：THINGVOLD Tom	D2：GRABOWECKY Christopher(CAN)
HB	D1：SAGRERAS Alejandro(ARG)	D2：PURCIK Libos(SVK)

◆ 抽選結果

後藤 洋一 個人総合決勝 ゆか Line  
種目別決勝 あん馬 E4  
倉島 貴司 予選 跳馬 E2

8. 審判会議報告：

□ ゆか

- ・力技や旋回技でゆかに触れる：-0.10（毎回、1回の旋回でも2回触れれば-0.20）
- ・着地減点：10cm程度の足開きで踵を揃える場合は減点なし
- ・着地が動かなくても踵を揃えない：肩幅まで-0.10 肩幅を超える：-0.30
- ・認められていない2秒以上の静止：-0.10
- ・演技終了は両足を揃えたところで計測が終了となる
- ・両足が外に出て戻った後に再び出た場合のライン減点：-0.60（0.30+0.30）

□ あん馬

- ・交差倒立で腰が低すぎる捌き：-0.50
- ・交差倒立での腰まがりは、不認定もある。開脚のまま：-0.30
- ・交差倒立で両手がポメルから落ちた場合：難度不認定

□ つり輪

- ・ホンマ支持から脚前拳支持：-0.30
- ・開脚前拳支持から脚前拳支持：-0.30 開脚水平支持から脚前拳や開脚前拳は減点なし
- ・脚上拳十字懸垂は、腕が水平で脚が垂直

- ・ 十字懸垂の後の腕のまがりは減点：－0.10～－0.50
- ・ 難度表にない2秒以上の停滞：毎回－0.10
- ・ 演技開始等で逆懸垂になる際の腕のまがり：－0.10・－0.30

□ 跳馬

- ・ 第1局面の脚開き、膝のまがり
- ・ 第2局面の姿勢（宙返りの脚開き、つま先）

□ 平行棒

- ・ 静止技での時間不足：－0.30（2秒未満、脚前挙、力倒立、振動倒立）
- ・ モリスエやバーレで腕支持になる際の体の伸ばしがない：－0.10、－0.30
- ・ モリスエやバーレでバーにぶつかるような捌きの減点：－0.50

□ 鉄棒

- ・ ヤマワキは高さ、姿勢で差をつける。高さが無い、屈身の深い捌きはボローニンと判定する
- ・ ツォ・リミンは、1回ひねり+1回ひねりでC難度と判定し、ひねり不足は減点の対象や不認定（B難度）となるケースもある
- ・ アドラー系の技、二つまでの規則を確認

□ その他

- ・ D-Score に対する質問は、D 審判に直接するのではなくアリーナ内に設置された机に書面を提出すること

9. 新技申請：

□ つり輪

- ・ 背面水平懸垂経過脚上挙十字懸垂(2秒)：E 難度(IV)  
NG Kiu Chung(HKG) 2014年ワールドチャレンジカップ Doha で発表
- ・ ゆっくりと前方伸腕伸身支持回転十字懸垂経過水平支持(2秒)：D 難度(IV)  
NG Kiu Chung(HKG) 2014年アジア競技大会 Incheon で発表
- ・ 輪の高さで前方宙返り直接脚上挙十字懸垂：E 難度(III)  
TANAKA Yusuke(JPN) TSUKAHARA Naoya(AUS)
- ・ 伸腕伸身正面水平懸垂経過脚上挙十字懸垂(2秒)：E 難度(III)  
TSUKAHARA Naoya(AUS)

□ 跳馬

- ・ 伸身カサマツとび 5/2 ひねり：6.4 #232  
YAN Hak Seon(KOR)

□ 平行棒

- ・ 前方屈身2回宙返りひねり下り：G 難度(V)  
ARICAN Ferthat(TUR)

10. 結果：

□ 予選団体

	国名	ゆか	あん馬	つり輪	跳馬	平行棒	鉄棒	合計
1	中国	61.398	58.106	61.365	60.915	62.182	58.732	362.698
2	日本	62.882	58.840	60.532	60.357	61.766	57.232	361.609
3	USA	60.998	59.598	61.266	60.133	62.099	56.299	360.393
4	GBR	60.399	59.473	59.432	60.266	59.157	58.466	357.193
5	RUS	61.748	55.432	61.498	60.015	60.466	57.798	356.957
6	GER	59.800	53.932	58.840	59.466	60.340	56.265	348.643
7	BRA	59.832	54.765	59.149	59.924	57.998	56.432	348.100
8	SUI	57.899	58.432	56.665	57.865	59.066	56.066	345.993

□ 予選個人

個人総合	内村 航平	92.165	1位	予選通過
	田中 佑典	89.507	6位	予選通過
	加藤 凌平	89.331	7位	
	野々村 笙吾	88.581	11位	
ゆか	白井 健三	16.033	2位	予選通過
	加藤 凌平	15.833	4位	予選通過
あん馬	内村 航平	15.166	12位	
	野々村笙吾	14.866	18位	
つり輪	田中 佑典	15.300	13位	
	内村 航平	15.266	17位	
跳馬	白井 健三	15.159	5位	予選通過
平行棒	田中 佑典	15.700	3位	予選通過
	加藤 凌平	15.533	5位	予選通過
鉄棒	内村 航平	15.200	2位	予選通過
	加藤 凌平	14.366	21位	

※個人総合は6種目エントリー、種目別は上位2名を記載

□ 団体決勝

		FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total
1	CHN	44.766	43.724	46.532	46.066	46.324	45.957	273.369
2	JPN	46.732	45.341	44.532	45.766	46.032	44.866	273.269
3	USA	46.500	44.240	44.766	45.065	45.365	44.433	270.369
4	GBR	45.633	45.649	44.166	45.657	43.966	44.099	269.170
5	RUS	45.715	42.933	46.391	44.999	43.032	43.433	266.503
6	BRA	44.699	43.000	44.466	45.532	43.199	42.666	263.562
7	SUI	43.666	42.957	42.240	44.133	43.765	40.532	257.293
8	GER	41.299	39.765	43.366	42.466	45.466	43.798	256.160

□ 個人総合決勝

			FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total
1	内村 航平	日本	15.766	15.133	15.000	15.633	15.200	15.233	91.965
2	Whitlock M	GBR	15.466	16.000	14.466	15.366	14.975	14.200	90.473
3	田中 佑典	日本	15.200	14.200	14.733	14.933	15.883	15.500	90.449
4	Verniaiev O	UKR	14.833	15.233	14.333	15.400	16.033	14.466	90.298
5	Belyavskiy D	RUS	15.133	15.133	14.700	15.033	15.366	14.400	89.765
6	Deng Shudi	CHN	15.300	13.833	14.866	15.200	15.700	14.833	89.732
7	Sasaki Jr. S	BRA	14.966	14.633	14.800	15.200	14.900	15.066	89.565
8	Hambuechen F	GER	14.966	13.466	14.533	15.066	15.433	15.100	88.564

□ 種目別決勝

ゆか	白井 健三	15.733	2位	銀メダル
	加藤 凌平	15.466	6位	
跳馬	白井 健三	15.062	4位	

平行棒	加藤 凌平	15.666	3位 銅メダル
	田中 佑典	15.041	5位
鉄棒	内村 航平	15.725	2位 銀メダル

## 11. 所感：

団体決勝においては、中国との一騎打ちの様相となった。前半2種目で3.5以上の大差をつけたものの、つり輪で一気に2点を返され、その後の3種目すべてのチーム得点で中国が日本を上回り、最終的にはわずか0.1の差で日本を逆転し、銀メダルという結果になった。

最後の鉄棒の採点に注目が集まりがちではあるが、Dスコアの差(-2.8)をEスコアで上回れなかったというのが冷静な分析であろう。正確にはEスコアの差は+3.1とライン減点(-0.4)の差であった。種目毎でみても、Eスコアでは5種目で中国を上回り、下回ったのはつり輪の-0.4のみであった。しかし、プレッシャーや思い入れもあったであろうその演技は、本来の実施とは少しずつ違ったものであったことは否めず、さらに着地がわずかな一歩となり、E審判員にアピールできなかった。結果、本来ならもっとリードしていけるはずのEスコアが下がり、Dスコアに飲み込まれてしまったと言えるだろう。そしてライバル中国も、最終種目の鉄棒で最高のプレッシャーの中で、日本を上回るDスコアの演技を逃げることなく攻めきって、大逆転を演じてみせた。採点には一言も二言もあるかもしれないが、中国選手のあの演技は敵ながらあっぱれと言わざるを得ない。日本は鉄棒が得意と言われながら、予選も決勝も、鉄棒で中国に負けたことは事実として受け止めなくてはならないであろう。さらにはつり輪1種目だけで2点もの大差をつけられたことは、根本から考えることが必要かもしれない。

団体上位3カ国のDスコア(団体決勝3名の合計)は以下のとおりである。

国名	ゆか	あん馬	つり輪	跳馬	平行棒	鉄棒	合計
中国	19.9	18.7	20.5	18.0	20.7	21.3	119.1
アメリカ	20.0	18.6	19.6	18.0	20.2	20.1	116.5
日本	20.7	19.0	18.9	17.6	19.9	20.2	116.3

個人総合では、内村選手が最後までミスを出すことなく着実に得点を積み重ね、5度目の優勝を勝ち取った。内村選手は、ゆかと跳馬で1位の点数を含め、平行棒までの5種目で着地を止める圧倒的な内容だった。2位には得意のあん馬で大量リードを得たWhitlock選手、3位には平行棒(全体2位)鉄棒(全体1位)と後半種目で一気に追いつけた田中選手が入った。昨年銀メダルを獲得した加藤選手を予選で上回っての決勝進出も含め、日本の個人総合の選手層の厚さを十分にアピールする結果だったといえよう。Dスコアに関しては、中国のDeng Shudi選手が39.3で最高値、ウクライナのVerniaiev選手が39.1であった。内村選手は38.6で全体4位、田中佑典選手は37.3であった。Eスコアでは内村選手53.365と田中選手の53.149の二人が突出しており、3位のBelyavskiy選手の51.965を大きく引き離している。このことは日本の体操の正確さをアピールする十分な材料といえよう。

種目別決勝には、ゆかで加藤選手と白井選手、跳馬に白井選手、平行棒に加藤選手と田中選手、鉄棒に内村選手が進出した。ゆかにおいては、15.80もの高得点をマーク(全体の5位)しながら、1カ国二人という決勝進出へのルールにより内村選手が外れた。あん馬での活躍が期待された亀山選手は予選での落下によって、鉄棒の田中選手は予選での着地の失敗によって、決勝への切符を逃した。

ゆかでは白井選手とロシアのAbliazin選手、ブラジルのHypolito選手が予選で高得点を出しており、白井選手が本来の実施をすれば勝てるというのが大方の予想だった。しかし、今回は予選同様、着地とラインオーバーに泣かされた結果となり、Abliazin選手に金メダルが渡り、白井選手は銀メダルとなった。あん馬ではBerki選手が返り咲き、つり輪では地元の大声援を受けた中国のLiu選手が金メダルを獲得した。跳馬では白井選手が1本目にシライ/キム・ヒフン(D6.0)を決め、2本



目にドリッグス(D5.6)をうまくまとめ銅メダルの可能性を残したが、決勝では白井選手以外7名が2本ともDスコア6.0以上の跳越技でありメダル獲得には至らなかった。金メダルは北朝鮮のRI Se Gwang選手が、Dスコア6.4の大技を2本そろえて勝ち取った。平行棒では加藤選手が本来の安定した演技を披露して15.666を獲得したが、Dスコアで上回る2人の選手がその上をいき、加藤選手に銅メダルが渡った。上位3名は着地まで良い実施であったが、終末技がD難度の加藤選手に対し、Verniaiev選手はF難度、Leiva選手はE難度の終末技を止めており、Eスコアにおいても好印象を与えた感があった。日本選手の前方系の終末技への取り組みの遅れが、具体的な数字になって現れてきたように感じた。鉄棒では、内村選手がカッシーナ～コールマンという手放し技の連続を決め、会場を大いに沸かせた。得点も15.775(D7.2 E8.575)というものであったが、それ以上にDスコア7.7を演じたディフェンディングチャンピオンのZonderland選手が、16.275で金メダルを獲得し、内村選手は銀メダルとなった。

今大会では、日本選手の美しさや技術の正確さを再確認できたものの、中国選手のパワー、海外スペシャリストたちのDスコアの高さを意識する必要があるのではないかと感じられた。そしてなにより、決勝の舞台上、日本のよさを損なうことなくDスコアを高めた演技を發揮できることを期待したい。

## 12. 種目別上位者の演技構成

### ◆ ゆか

#### 1. ABLIAZIN Denis(RUS) 15.750 D 7.1 E 8.650

前方宙返り 5/2 ひねり(E)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり(F)、前方宙返り 2 回ひねり～前方かかえ込み 2 回宙返り(D+D)、伸身トーマス(E)、十字倒立(C)、後ろとびひねり前方屈身 2 回宙返り(E)、後方宙返り 5/2 ひねり～前方宙返り 1 回ひねり(D+C)、後方宙返り 3 回ひねり(D)

#### 2. 白井 健三 (JPN) 15.733 D7.4 E8.433 Line-0.1

後方宙返り 7/2 ひねり～前方宙返り 2 回ひねり(E+D)、前方宙返り 1 回ひねり～前方宙返り 3 回ひねり(C+F)、テンポ宙返り～後方宙返り 3 回ひねり(B+D)、脚上挙支持から伸腕屈身力倒立(C)、後方宙返り 5/2 ひねり～前方宙返り 5/2 ひねり(D+E)、側方宙返り 1 回ひねり(C)、後方宙返り 4 回ひねり(F)

#### 3. HYPOLITO Diego(BRA) 15.700 D7.0 E8.700

後方宙返り 3/2 ひねり～前方宙返り 5/2 ひねり(C+E)、後ろとびひねり前方屈身 2 回宙返り～前方宙返り 1 回ひねり(E+C)、後ろとびひねり前方かかえ込み 2 回宙返り～前方伸身宙返り(D+B)、十字倒立(C)、後方宙返り 5/2 ひねり～前方宙返り 2 回ひねり(D+D)、伸身トーマス(E)、後方宙返り 3 回ひねり(D)

### ◆ あん馬

#### 1. BERKI Krisztian(HUN) 16.033 D7.0 E9.033

リーニン(D)、逆交差倒立(D)、フロップ(E)、コンバイン(E)、あん部馬背ロシアン 1080° (E)、ウ・グオニアン(E)、縦向きシュピンドル(D)、マジヤール(D)、シバド(D)、dsA 倒立 450° ひねり 3/3 移動下り(E)

#### 2. UDE Filip(CRO) 15.783 D6.7 E9.083

正交差横移動ひねり(C)、ブスナリ(G)、シュピンドル(D)、1/2 前移動(B)、あん部馬背ロシアン 1080° (E)、モギルニー(D)、ウ・グオニアン(E)、マジヤール(D)、シバド(D)、dsA 倒立 3/3 移動下り(D)

#### 3. TOMMASONE Cyril(FRA) 15.600 D6.9 E8.700

dsA 倒立 360° ひねり 3/3 移動下ろして支持(E)、リーニン(D)、逆交差倒立(D)、コンバイン(D)、フロップ(E)、ウ・グオニアン(E)、ロシアン 1080° (D)、マジヤール(D)、シバド(D)、dsA 倒立 450° ひねり 3/3 移動下り(E)

◆ つり輪

1. LIU Yang(CHN) 15.933 D6.9 E9.033

伸腕伸身逆上がり中水平支持(F)、懸垂から伸腕伸身十字倒立(E)、後ろ振り上がり上水平支持(D)、ジョナサン(D)、ホンマ十字懸垂(D)、伸腕伸身力十字倒立(E)、後ろ振り上がり中水平支持(E)、ナカヤマ(D)、後方車輪(C)、後方伸身2回宙返り1回ひねり下り(D)

2. NABARETTE ZANETTI Arthur(BRA) 15.733 D6.8 E8.933

後転上水平支持(E)、背面水平から引き上げ中水平(F)、ヤマワキ(C)、後ろ振り上がり上水平支持(D)、後転中水平支持(F)、ナカヤマ(D)、ジョナサン(D)、ホンマ十字懸垂(D)、前方車輪(C)、後方伸身2回宙返り1回ひねり下り(D)

3. YOU Hao(CHN) 15.700 D7.0 E8.700

懸垂から伸腕伸身水平支持(E)、ジョナサン(D)、後ろ振り上がり中水平支持(E)、伸腕伸身逆上がり脚上拳十字懸垂(E)、伸腕伸身中水平支持(E)、後方車輪(C)、伸身グチョギー(E)、リーニン2十字懸垂(D)、前方車輪(C)、後方伸身2回宙返り2回ひねり下り(F)

3. ABLIAZIN Denis(RUS) 15.700 D6.8 E8.900

後方伸腕伸身逆上がり中水平支持(F)、背面水平懸垂から引き上げ中水平支持(F)、ジョナサン(D)、ヤマワキ(C)、後ろ振り上がり水平支持(D)、アザリアン(D)、ナカヤマ(D)、後方車輪(C)、前方車輪(C)、後方伸身2回宙返り2回ひねり下り(F)

◆ 跳馬

1. RI Se Gwang(PRK) 15.416

1本目：屈身ドラグレスク

15.633 D6.4 E9.233

2本目：ツカハラとび後方かかえ込み宙返り1回ひねり 15.200 D6.4 E9.100 Line-0.3

2. RADIVILOV Igor(UKR) 15.333

1本目：ドラグレスク 15.200 D6.0 E9.200

2本目：ルーユーフ 15.466 D6.0 E9.466

3. DALTON Jacob(USA) 15.199

1本目：ロペス 15.133 D6.0 E9.233 Line-0.1

2本目：ヨー2 15.266 D6.0 E9.266

◆ 平行棒

1. VERNIAIEV Oleg(UKR) 16.125 D6.9 E 9.225

後ろ振り上がり前方宙返り支持(D)、棒下宙返りひねり倒立(E)、シャルロ(E)、単棒ヒーリー(E)、棒下宙返り倒立(D)、モイ(C)、チップルト(D)、ヒーリー(D)、ピータース(D)、前方かかえ込み2回宙返りひねり下り(F)

2. LEYVA Danell(USA) 15.933 D6.9 E 9.033

棒下宙返り倒立(D)、テンハイピン(F)、シャルロ(E)、棒下宙返り3/4ひねり倒立(E)、後方車輪5/4ひねり倒立(E)、後方車輪1回ひねり倒立(D)、後方車輪(C)、ハラダ(D)、前振りひねり倒立(C)、前方かかえ込み2回宙返り下り(E)

3. 加藤 凌平(日本) 15.666 D6.7 E 8.966

後ろ振り上がり前方宙返り支持(D)、棒下宙返りひねり倒立(E)、棒下宙返り倒立(D)、屈身ベール(E)、チップルト(D)、モリスエ(D)、ヒーリー(D)、懸垂前振り後方かかえ込み宙返りひねり腕支持(D)、前方開脚5/4宙返り腕支持(D)、後方屈身2回宙返り下り(D)

◆ 鉄棒

1. ZONDERLAND Epke(NED) 16.225 D7.7 E 8.525

エンドー1回ひねり大逆手(D)、カッシーナ~コバチ(G+D)、コールマン~ゲイロード2(F+E)、アドラー1回ひねり逆手倒立(E)、アドラーひねり倒立(D)、シュタルダーとび3/2ひねり大逆手(E)、後方とび車輪1回ひねり(C)、後方伸身2回宙返り2回ひねり下り(E)

2. 内村 航平(日本) 15.775 D7.2 E8.525

アドラーひねり倒立～伸身トカチェフ(D+D)、カッシーナ～コールマン(G+F)、シュタルダーとび 3/2 ひねり片大逆手(D)、アドラー1 回ひねり片逆手倒立～ヤマワキ(D+D)、エンドー(B)、後方とび車輪 1 回ひねり(C)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り(E)

### 3.MOZNIK Mario(CRO) 15.000 D6.7 E8.300

エンドー1 回ひねり大逆手(D)、伸身トカチェフ～リバルコ(D+D)、モズニク(E)、アドラーひねり倒立～開脚トカチェフひねり片大逆手懸垂(D+D)、アドラー(C)、シュタルダーとび 3/2 ひねり大逆手(E)、逆手背面車輪(C)、後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り(D)

## 4. 国内競技会（全日本個人総合・種目別・団体選手権、NHK 杯）総括

### □ ゆ か

D スコアは白井健三選手（岸根高校）の 7.4 を筆頭に徐々に 6 点台後半から 7 点台の演技がみられるようになってきた。選手たちの努力に敬意を表すると同時にさらに D スコアが 7 点台の演技を実施してくれることを期待する。

D スコアを高めるためにはタンブリングを連続し組合せ加点を有効に獲得することが必要となるが、大半の演技がひねり系の技のみで構成されており、ビッグタンブリングが非常に少ないのは寂しく感じた。

年度当初の競技会では不安定な着地が目立ったが、徐々に安定性が増し、意識して止めようとしている捌きがうかがえた。ただし、情報 21 号に記載した足を揃えない着地に関する減点はまだ多くの実施で対象となった。

側方宙返り 1 回ひねりは“後ろとび側方姿勢”を意識した実施がみられたが、まだ不明確な開脚姿勢や後ろとびひねり技のような捌きが散見された。

宙返りの連続の最後に“前方宙返りひねり”を実施する際、明確な前方宙返りがみえず横回りのような捌きや高さ不足、姿勢欠点が多くみられた。

演技時間がモニターに表示される競技会において、最終コーナーでモニターを確認する仕草が目立った。また、タンブリング後の安易なコーナー取りや単純なポーズで指先まで意識されていない無粋な捌き、2 秒以上の長い静止も多かった。これらは演技のまとまりを阻害する不要な動きであり美しさに欠けてしまう。体操的な動きの一つひとつまで意識した丁寧な実施を期待したい。

### □ あん馬

今年度、交差倒立技（D）や馬端から馬端への転向移動技を多く実施する選手が格段に増え、各選手が D スコアアップに努めてきた印象を持った。その成果もあり、D スコアの平均値もアップした。各大会の平均 D スコアは個人総合予選 5.7、同決勝 5.9、NHK 杯 5.9、種目別予選 6.0、種目別決勝 6.3、団体予選 5.7、団体決勝 6.1 であった。また、交差倒立技で腰を深くまげて力を使って上げるような捌きが減り、振動技術を利用して倒立まで持ち込む良い実施が多く見られた。

実施面においては、縦向き移動技での角度逸脱に加え、脚開きや腰まげなどの姿勢欠点が見られる実施が多かった。また、交差技前後の脚の入れや抜きでの足先の高さが低い実施においても減点の対象とした。難度認定に関しては、交差倒立や倒立下りで、脚や腰が大きく下がった実施は難度不認定とした。また、転向移動技では、終末局面において明確な正面支持姿勢が見られないまま落下したものは、例え両手が馬背に触れていたものであっても不認定とした。

全日本団体では、全体を通して落下者が少なかった。落下者数は予選出場 40 名中 4 名、決勝では 24 名中 2 名であった。また、決勝では 3 名の選手がブスナリ（G）を実施した。

次年度も引き続き、高難度技を多く取り入れられる技術と体力を身につけ、D スコアアップを目指していただくことを切望する。

## □ つり輪

Dスコア 6.5以上の演技は4大会で10名延べ23演技であり、国内上位選手の大半がDスコア6点前後に集中しており、さらなる向上を強く感じた。演技実施において、力静止技の姿勢や時間について意識している選手が多くなってきたように思われた。しかし、その技への持ち込み方やその技から次の技への捌き方まで意識している選手は少ないと感じた。例えば、後転中水平支持では腰の反動を使っている捌き、け上がり十字懸垂では肘のまげ伸ばしを利用した捌きなどである。ホンマ十字懸垂では肩が上がってしまう捌きについて改善傾向にあったが、再びおろそかな実施になっている。十字懸垂等の力静止技から逆懸垂になる際には、無意識に肘をまげているような捌きも多かった。静止姿勢では、肩や頭は静止していても足先が動いているなど姿勢や時間以外の部分で弱さを感じるがあった。倒立も同様にロープを揺らさず、輪やベルトに触れない安定した正しい姿勢は少なかった。今後の課題としては、倒立や力静止技の姿勢、時間だけでなく、持ち込み方や次の技への捌きも含め力強さが表現されることを希望する。

## □ 跳馬

世界選手権南寧大会で厳しい採点であった場合に備え、厳しい採点スケールで臨んだ。いずれの大会においてもEスコアは選手の競技力が忠実に反映されていた。Eスコアについては、先ず概ね着地への意識は高まっているように感じられた。しかし、ラインオーバーを伴う実施が多く、4大会で283演技中82回のライン減点があり、約3割の跳越で減点がなされたことになる。ライン減点は、技術不良による歪んだ跳越に起因していると考えられるので是正されたい。

跳越グループIIの技における、第一局面での姿勢欠点については、全体的に改善傾向であるように感じられた。引き続き明らかな脚の開きが無い実施を心がけて欲しい。また種目別においては、グループIかIIか紛らわしい実施も無かったように感じた。Dスコアについては、6.0以上の技の実施数が増えたのは好ましく感じた。しかし勝負がかかった場面で実施できるだけの安定感が確保されていない状況も伺える。大過失無く確実に実施できる競技力の獲得が急務であろう。鈴田佳祐選手(福岡大学)によってDスコア6.4の跳越技(リ・セグァン)が発表された。完成度の高い素晴らしい実施であった。後続する選手を期待する。競技運営面では、跳越技番号の表示を行わない選手が多数であった。掲示板が設置されている以上は、表示するのが望ましいと感じた。

## □ 平行棒

Dスコア向上のためにシャルロ、ピアスキーなど単棒倒立になる技が増加してきた。春先の競技会では静止局面がみられないため不認定となるケースや1秒未満の静止で中欠点の減点となるケースが多かったが、秋にかけて技の習熟が増し、不認定や中欠点とも少なくなった。今後は単に静止するだけでなく、その持ち込み局面で肘のまがりなどの姿勢欠点をなくし、倒立でのキメを表現できるようにして欲しい。また、バブサーの実施も増えてきているが、バーを掴む際に、脚が下がり支持局面がみられる捌きや上半身が落ちてしまい脚が残る捌きなど、水平位で懸垂を満たすものは少なかった。バブサーやチップルトのために棒端へ倒立ひねりで移動していく際、倒立位の逸脱や手の握り直しなど減点をともなう選手がみられた。演技後半でDスコアを高めるために前振り1/4ひねり単棒横向き倒立を実施する選手は丁寧さに欠けた実施が多かった。連続された単棒浮腰上がり倒立でも減点がみられ、その2つの技でEスコアを下げる結果になった。後方屈身2回宙返り下りは着地をねらった実施が多くなったことは喜ばしいが、世界の流れから考えるとE難度以上の終末技を国内大会でも実施されることを期待する。

## □ 鉄棒

Dスコアは全体的なアップは見られたが、7.0を大きく超えるような思い切った取り組みはなかなか見られなかった。組合せ加点は0.1か0.2がほとんどであり、中国選手のような4つの組み合わせを演技に組み込む選手は皆無であり、手放し技の連続を実施した選手は1名だけであった。単

発の手放し技でカッシーナやコールマンが増えてきている一方、B 難度や C 難度の技も 10 技に数えなければならない演技構成があり、相対して D スコアの向上に繋がっていないようだ。手放し技では、キャッチしたときに肘がまがり、つまったような捌きが目立った。アドラー1 回ひねり～ヤマワキの連続は定番であり、多くの選手が実施しているが、アドラー1 回ひねりでの倒立位からの外れや軸ずれなど減点が複合するようなケースがみられた。また、アドラーに持ち込むための前方車輪において極端なスピードの減少や腰とりなど美しさを損なう捌きも散見された。ひねって大逆手になる技では 0.10 の減点ですんだ選手はごくわずかで、大半が 0.30 以上の減点が伴っており、演技に組み入れた分だけ減点が増えているので捌き方の工夫を期待したい。

着地については転倒や両手で支えるようなケースは減ってきたように感じたが、止めているという印象は薄かった。大事な場面でも止めることができるようになることを期待する。

## 5. 2013 年版採点規則正誤表

日本語版 2013 年版採点規則の誤植・追加等による訂正

ページ	訂正箇所	(誤)		(正)
p22	下から 5 行目	(ユース : 8 技)	⇒	(ジュニア : 8 技)
p26	下から 1 行目	(補足 3 参照)	⇒	(補足 2 参照)
p30	9 - 1 条 1.	(補足 2 参照)	⇒	(補足 3 参照)
p37	9 - 4 条 E 審判の減点項目 倒立でぐらつく、または倒れる		⇒	小欠点 0.1 に + を追加
p113	IV-65 (バンゲルダー)		⇒	(2 秒) を追加
p125	1 3 - 2 条 D スコア 5	姿勢の定義は 4 部・3 を参照	⇒	姿勢の定義は補足 3 を参照
p133	II-16 かかえ込みツカハラとび 3/2 ひねり かかえ込みカサマツとびひねり 3.0		⇒	4.0
p200	第 4 部 補足 2.	(第 7 - 4 条 m を参照)	⇒	(第 7 - 4 条 k を参照)
p201	第 4 部 補足 3. i) iv	前転とび前方宙返り (グループ III)	⇒	(グループ I)
p201	第 4 部 補足 3. i) iv	側転とび 1/4 ひねり前方宙返り (グループ IV)	⇒	(グループ II)
p201	第 4 部 補足 4.	第 5 - 2 b と並んで	⇒	第 5 - 1 d と並んで

## 6. 2015年度採点指針

### □ 全体として

- ① 安定した演技実施を基盤に、高められた D スコアを有する演技
- ② 美しさ、力強さを表現した演技実施
- ③ 着地への準備局面を有し、意識的に止められる終末技

2014年世界選手権南寧大会の団体決勝（18演技）では D スコアで中国に 2.8、アメリカに 0.2 下回っていた。この事実を真摯に受け止め D スコアの向上に努めていただきたい。

### □ ゆか

- ① 雄大なタンブリングや正確なひねり技による先取りのある安定した着地
- ② グループ I の旋回技や力静止技において丁寧で美しさを表現する演技  
ひねりを伴った宙返りの連続では、明確なひねりの終了を示して次の宙返りに連続することが望ましい。着地については、止まっても踵を揃えず開いたままでは減点の対象となる。  
跳躍技と跳躍技の間のポーズやターンにも指先や肩のラインを意識した姿勢を示してほしい。

### □ あん馬

- ① 安定感があり、終末技までスピード感を保ち、しなやかかつ十分に体に体を伸ばした旋回
- ② 倒立を経過する旋回技や交差技において、スムーズに倒立位に持ち込める技術  
ブスナリ系の技は、倒立でのひねりや移動でスピードが落ちる、振り下ろし局面で力を使用することは減点の対象となる。倒立を経過する技で上昇時に足先が明らかに下がれば難度は不認定となる。

### □ つり輪

- ① 演技全体として力強さを表現した演技構成
- ② 倒立や静止技で正確な姿勢と時間  
D スコアを高めるためには中水平支持や十字倒立を様々な持ち込み方の工夫をして、演技に組み入れてほしい。力静止技において、2秒未満の静止は中欠点であるということを再認識してほしい。十字懸垂の後に肘をまげて逆懸垂になる捌きは減点の対象である。倒立位で腕がロープに触れる、倒立位で肘や腰を使って調整することは演技全体の貧弱さを感じさせる。

### □ 跳馬

- ① 雄大で準備局面を示した着地を有する跳越
- ② 安定感、確実性のある D スコア 6.0 以上の跳越技  
国内で D スコア 6.0 の跳越技に挑む選手の大半は、跳んでみなければどうなるかわからないといった状況である。勝負のかかった状況下においても安定して 6.0 の跳越技に挑めるよう準備してほしい。

### □ 平行棒

- ① 倒立位を経過する振動技で角度減点の無い安定した実施
- ② 振幅の大きさや雄大な空中局面を示した実施  
倒立位を経過する振動技は、流動的でありながらも静止できる実施が望ましく、静止することが不可能と思われる捌きは減点の対象となる。倒立位での握り直しは毎回減点の対象となる。

## □ 鉄 棒

- ① 雄大な空中局面を示す安定した手放し技や終末技での実施
- ② 倒立位を経過する技、ひねりを伴う振動技での角度減点の少ない実施  
ひねりを伴う技の角度の逸脱は厳密に対処する。両大逆手や片大逆手になる技で45°を超えた逸脱に対しては0.30の減点が課される。

## 7. 難度認定及び演技実施の確認事項と FIG 通達

(新規追加、変更箇所は赤字にて記載)

### □ 一般条項

1. 採点規則 7-4 条 5k)により、90°を超えてひねりが少ない場合、低い難度で判定する。
2. 採点規則や本情報内で同一棒（同一番号）の技は同一技として判定される。ゲイロードと大逆手ゲイロードは同一棒（同一番号）であり、同一技となり出現順に一技のみカウントされる。ただし、同一棒内で「別技と判断する」、と記載された技は両技とも演技内で実施することができる。
3. 採点規則 p26 第 7-4 条 h)にあるような落下した場合に限り、その技を繰り返すことができる。平行棒や鉄棒の振動技で 45°を超えた逸脱で難度が不認定となった場合、その技を繰り返すことはできない。
4. 終末技やゆかの宙返りの着地で転倒した場合、減点は最大 1.00 とする。  
例) 3 歩動いて転倒 ≠ -1.30
5. 着地後、明らかに手や膝で支えるような場合、転倒 (-1.00) と判定する。
6. 終末技で着地姿勢が低い、または余裕のない着地は減点となる (-0.10、-0.30)。
7. ライン減点：片足が直接エリア外へ出て着地した後、もう一方の足（または身体の他の部分）がさらに線外へ出た場合は、身体の二カ所が出たことに対して 0.30 の減点となる。ライン減点は、ゆかと跳馬で同じように適用する。
8. 短い演技に対する措置は E スコアの満点をすべて 10.00 とし、決定点からの減点（ニュートラルディダクション）で対応する（第 8 章 8-1 条 3 項 採点規則 p29）。

7 技以上	.....	減点なし
5~6 技	.....	-4.00
3~4 技	.....	-6.00
1~2 技	.....	-8.00
0 技 (0.00 の場合)	.....	D スコア : 0.0 E スコア : 0.00

9. 服装違反の減点は、発覚した種目で 1 回のみ決定点から減点 (-0.30 : 国内対応) とする。審判長は、次の種目以降の D1 (主審) に伝達する。
10. オーダーミスは、発覚した最初の選手から 1 回のみ決定点から減点 (-0.30 : 国内対応) とする。
11. 採点規則第 3-4 条では D スコアへの質問は「1 分以内に」と記載されているが、国内対応としてローテーション内でも認める。最終演技者の場合、次のローテーションのウォームアップ内も認める。
12. 難度表の●印は、FIG 制定の年齢によるジュニア競技会用の規則であり、国内ジュニア大会とは無関係である。
13. リファレンスジャッジシステムは、競技におけるさらなる採点の公平性を維持する目的で作成され、E スコアにおける問題発生の場合、自動的かつ短時間で訂正するシステムとして導

入された。E 審判の採点と R 審判の採点に隔たりがあった場合、コンピュータ内で自動的に R 審判の得点が E スコアに反映するようにプログラム化されている。国内では採用しない。

14. 宙返りや終末技での着地において、安全上の理由により選手は脚を開いて着地をすることができる。その際、十分に踵を揃えられるだけの間隔でつま先を動かすことなく、踵を閉じて完了しなければならない。脚を開いた着地の減点は下記のとおりである。

- ・ 肩幅以内でつま先を浮かさず踵を揃える…………… 減点なし
- ・ 肩幅以内で踵を揃えない…………… -0.10
- ・ 肩幅以内で脚を上げて踵を揃える…………… -0.10
- ・ 肩幅を超えて脚を上げて踵を揃える、または揃えない …… -0.30

※その他全ての実施減点（宙返りの空中局面や着地準備等）も常に評価の対象となる。

15. 採点規則(p36)9-4 条 E 審判の減点項目

欠点	小欠点	中欠点	大欠点
ゆか、マット、または器械に触れる	+		

\* 中欠点から小欠点へ変更

この減点の対象は、平行棒の懸垂振動で足がゆかに触れた場合やあん馬の旋回技で脚が器械に触れた場合等が挙げられる。器械にぶつかる（-0.50）および、不安定な着地で手が触れる（-0.30）は、従来通りである。

□ ゆ か

1) 難度認定の確認事項

1. 両足旋回から続けられたロシアン転向技は、両足抜きの後の正面支持から転向度を数える。また、両足旋回を挟まないでロシアン転向技を実施した場合、最初の正面支持から転向度を数える。
2. すべての力倒立技は静止が必要であり、静止時間と技の認定に関してはより厳密に判定する。
3. 二つの力技で一つの難度を得る技において、片方に静止がみられなかった場合は、もう片方の低い難度のみを認定する。例えば、マンナ（1秒）から伸腕屈身力倒立（静止無し）を行った場合、マンナのC難度のみを認定する。
4. 採点規則10-2条2.5.g、倒立前転開脚浮腰支持経過倒立（I-44）、倒立から伸膝前転脚前拳支持経過倒立（I-45）は力技に属する。



I-44



I-45

5. 連続された宙返り技の着地で瞬時のコントロールも示さずに臥せるような実施(-0.50)は、組合せ加点の対象としない。
6. ベスト 10 に含まれていない技でも組合せ加点を与えることができるが、繰り返し技やグループ内で 4 技を超えて削除された技との組み合わせは認定しない。
7. 「後ろとびひねり前方 2 回宙返りひねり」において、明確な前方宙返りが示されない場合はグループⅣの技とは認定されず、グループⅢの後方 2 回宙返り 1 回ひねりと判定する。
8. 「後ろとびひねり前方宙返り」において、ひねるきっかけが遅く、後方宙返りひねりに見える場合はグループⅢと判定する。



9. 「側方宙返り1回ひねり」は、後ろとびの後に側方開脚姿勢を示してから1回ひねりをする捌きをグループⅣで判定する。安全上の理由によりさらにひねりを加えることはできない。上記以外の捌きはグループⅢで判定する。
10. グループⅣ-37、43、44、45、46、50、51は、難度とグループを得るためには横向きで着地しなければならない。
11. ゆかにおいて、終末技はグループⅤの技として判定するとともにグループ（Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ）内4技の一つとしてもとらえられる。終末技を含めて同一グループの技が5技以上あった場合、終末技を最初に数え、最も低い難度の技を除外する。
12. グループⅡ、Ⅲ、Ⅳの技が終末技のみで実施された場合（その他では実施なし）、その技はグループⅤとみなされ、グループ（Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ）としての0.50をDスコアに加算しない。
13. 終末技で、既に実施された技を繰り返した場合、終末技の難度は不認定となる。
14. 前方宙返り3回ひねり（シライ2）：F難度 p57Ⅱ-48
15. 前方かかえ込み2回宙返り1回ひねり：E 難度 p57Ⅱ-59
16. 後方宙返り4回ひねり（シライ/グエン）：F難度 p59Ⅲ-36

## 2) 演技実施上の確認事項

1. すべての力技（力倒立群を含む）は静止が必要であり、静止時間が2秒に満たない場合は-0.30、静止が見られない場合は-0.50の減点となる。
2. ロシアン転向技で反り身の目立つ姿勢は減点（-0.10）。
3. 「倒立から伸膝前転脚前拳支持経過倒立（2秒）Ⅰ-45」において、脚を抜いて倒立に達する過程で開脚しても減点の対象としない。
4. 十字倒立への経過で、速いリズムで倒立に持ち込む捌きの減点（-0.10）。
5. 脚上拳支持において、上半身と脚部に開きがあるような捌きは柔軟性に欠ける減点の対象となる（-0.10、-0.30）。マンナは、脚部の裏側が水平で減点なしとなり、第9-2条8項に則って角度の減点がなされる（ $<15^\circ$ ：-0.10、 $<30^\circ$ ：-0.30）。
6. タンブリング間の動き・コレオグラフの工夫は演技の持ち味となるが、無味乾燥とした動き、コーナーでの単純な場所取りや方向転換、アクロバット技の前の長すぎる停滞（2秒以上）は減点となる。宙返りの着地後すぐにコーナーなどへ移動する捌きは、安定した着地をとることができる実施を前提とし、不安定な着地姿勢からの移動は実施減点となる（-0.10、-0.30）。
7. コーナーへの単純なステップや移動は、0.10の減点（良い動きで少なくとも $180^\circ$ のターンが含まれなければならない）。宙返りの着地後にジャンプをして伏せる捌きは、安定した着地をとることができる実施を前提とし、ジャンプをする際は垂直方向への上昇を示してから正面支持臥にならなければならない。不安定な着地から前に倒れ込むようなジャンプは大欠点となる。
8. アクロバット技の連続で安定した着地を示しても高さ（浮き）がない場合、実施減点となる。
9. アクロバット技のやや高さがない実施の減点（-0.10）。
10. かかえ込み宙返りに関して不明瞭なかかえ込み姿勢は実施減点となる。
11. アクロバット技の連続でひねり不足が明らかな場合の減点（-0.30）。
12. 宙返り転技の高さ不足の減点（-0.10）。支持局面で、手の甲で転になる実施の減点（-0.30）
13. 宙返り転技は、転の前に身体の伸ばしが要求される。体をまげたまま転になる捌きは小・中欠点である。また、宙返りの回転不足等で危険を感じるような実施は大欠点（-0.50）となる。
14. 宙返り転技で転がった後、スムーズに直立できないことに対する減点（-0.30、-0.50）。
15. トーマス等のひねりを伴う宙返り転技で、ひねり不足により半分の状態で転がった場合の減点（-1.00：半身での転、-0.30：ひねり不足、-0.10：技術欠点）。

16. 転や正面支持臥になる技を、2回を超えて実施した場合、3回目からE審判による減点となる（毎回-0.30）。同一技を2回実施した場合でも2種類実施の場合と同様に、3回目から減点の対象となる。小さくとんで正面支持臥になる捌きや幅をとるための小さなとび前転もこの対象となる。
17. 同一対角線の使用については、同じ対角線を連続して3回以上、何回連続で使用しても0.30の減点となる。その後、別の対角線で更に3回連続の使用があった場合、あらたに0.30の減点が発生する。
18. 同一対角線の使用については、アクロバットシリーズの間に力技や旋回技などを実施しても、対角線の方向を変えなければカウントは継続される。

## □ あん馬

### 1) 難度認定上の確認事項

1. グループⅠの倒立を経過する交差技は演技中2回まで認められる。この規則は旋回技を基本とする種目の特性が損なわれることを避けるためである。
2. マジャーレ～外向き旋回～シバド移動を実施する場合の外向き旋回は、馬端外向き正面支持からカウントし正面支持まででA難度を認定する。



3. グループⅡの旋回倒立から下ろす技で明らかな力の使用や停滞は、難度不認定となる。
4. 旋回倒立から旋回、支持になる技で落下した場合は、難度不認定となる。
5. 旋回倒立の格上げの原則は次の通り
  - ①旋回倒立で「360° ひねる」……………1段階の格上げ
  - ②旋回倒立で「270° のひねりを伴う 3/3 移動」……………1段階の格上げ
  - ③旋回倒立から「下ろして旋回を回す」……………1段階の格上げ
  - ④旋回倒立から「360° ひねり後下ろして旋回を回す」 ……2段階の格上げ（①と合計し3段階）
6. グループⅡの旋回倒立から下ろす技（旋回や開脚支持）は演技中2回まで認められる。
7. 一把手上縦向き支持からあん部馬背へ移動しながら旋回1回ひねり：E難度（Ⅱ-35と同一枠）
8. 一演技中、縦向きでの3部分移動は、前移動1回、後ろ移動1回のみ認定される。マジャーレ移動（D）の後に縦向き前移動3/3（馬端－把手－把手－馬端：C）を実施しても難度不認定となる。
9. 縦向き前移動の終了局面は縦向き正面支持である。マジャーレ移動の終末局面で横向き背面支持（入れて横向き背面支持）になるような場合は縦向きの3部分移動と判定せず2部分（B難度）とする。
10. 馬端中向き縦向き正面支持から前移動 1/3～一把手上縦向き旋回をする場合、一把手上への移動後正面支持までを前移動（A難度）と認定し、正面支持から次の縦向き旋回を数える。
11. 縦向きとび前移動3/3（Ⅲ-47：ドリッグス）は、明確なとびの後両手同時正面支持を示した場合E難度と判定し、それ以外はD難度（Ⅲ-46：マジャーレ移動）とする。
12. 他に記載されていない限り、すべての旋回技の開始と終了は正面支持である。下向き転向（フクガ）やショーで背面支持から片足振動技に繋がった場合、難度不認定となる。

13. 馬端部横向き支持から 1/4 転向しながら一把握上に縦向き正面支持になるとループと判定する。下図のように後半に 1/4 転向し横向き支持になるとシュテクリ B と判定する。



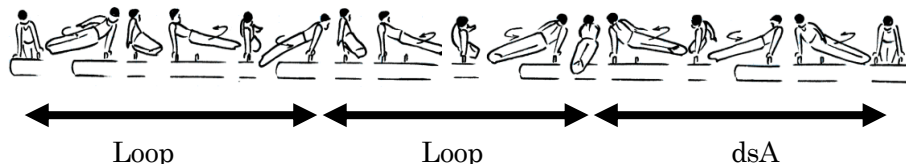
ループ



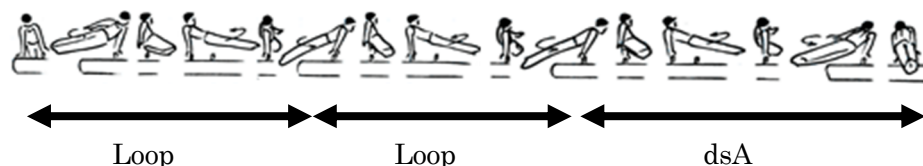
シュテクリ B

14. 一把握上縦向き旋回連続+dsA はフロップ技となり D 難度で認定する。下記の 2 例はいずれも D 難度となる。

例①

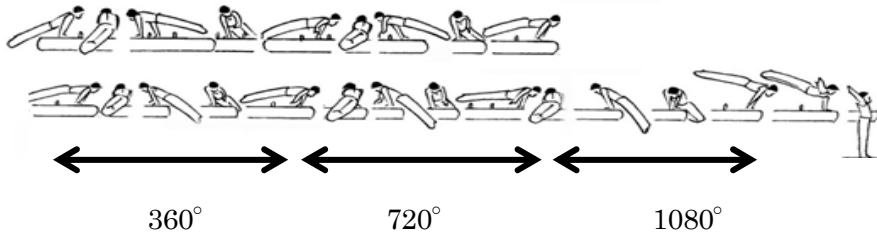


例②



15. フロップやコンバインで落下した場合、落下までに成立した部分の難度を認定する。ただし、明確な正面支持を示した場合に限る。コンバインでは一把握上で手の握り換えが終了した時点をもって正面支持とする。
16. ロシアン転向技は、把握上および馬背上において終末技を含めて最大 2 回まで実施することができる。この条項に関しては、終末技を一番目に数え、ベスト 9 に含まれないロシアン 180° 転向 (IV-55) も含め出現順にカウントされる。ロシアン転向技のカウントに、コンバイン、ウ・グォニアン、ロス、トンフェイ (IV-33、34)、クロール、IV-69 は含まれない。
17. シバド移動からロシアン転向技を実施する際、縦向き正面支持を示す前に転向を開始した場合、シバド移動 (D 難度) は成立しロシアン転向の開始は横向き正面支持となる。
18. ウ・グォニアンの途中で落下または停止した場合、難度は不認定となる。3/3 移動後に明確な正面支持が認められた後に落下した場合、難度は認定される。
19. ウ・グォニアンは、あん部馬背支持に達するまでに 360° の転向を完了し、残りの 360° の転向を馬端馬背支持に達するまでに完了しなければならない。3 部分移動が完了した時点で 360° を転向し、続けて馬端馬背支持で 360° の転向をするような捌きは 2 技と見なす (ロス+ロシアン 360° 転向)。
20. ロシアン転向技の途中で落下した場合、落下までの転向度数分の難度を認定する。ただし、明確な正面支持が認められた部分までとなる。
21. 倒立位を経過する交差技や終末技において、倒立への上昇局面で明らかに足先が下がった場合、難度は不認定となる。
22. ロシアン転向下りで途中落下した場合、常に下記の通りに難度認定される。D 審判が終末技で落下したと判断した場合、ロシアン転向下りの難度とグループ V は認定されない。E 審判は通常の落下+実施減点を適用する。  
例) ロシアン 1080° 転向下りを実施しようとした途中経過においてロシアン 900° 転向を完了して落下した場合、C 難度 (グループ IV) を認定する。選手はロシアン転向下りの難度とグループ V を獲得できない。このような場合、選手は難度とグループ V を確保するため、再度、ロシアン転向下りをする事が認められる。
23. 馬端外向き縦向き正面支持から開始されるロシアン転向下りは、転向した度数をすべて含めて

数えるものとする。下図のようにウ・グォニアンから実施されたロシアン転向下りは、馬端外向き正面支持から開始となりロシアン 1080° が成立し D 難度が認定される。



24. 倒立を経過する終末技は、1 回にかぎりやり直すことが認められる。ただし、落下減点 (-1.00) と実施減点を伴う。
25. 終末技は旋回技から実施しなければならない。片足振動技や不十分な旋回技からの倒立は終末技として認定しない。
26. 終末技の 450° 以上と表記されているのは、倒立下りで着地をする際 90° の転向を行うためであり、 $360^{\circ} + 90^{\circ} = 450^{\circ}$  と考える。
27. 倒立下りの 3 部分移動と 360° ひねりは、移動しながらひねっても、移動する前や後にひねっても難度は認定される。
28. 倒立を経過する終末技で移動やひねりが含まれた場合、馬体を越えなくても技の成立した部分まで難度を認定する。

例) dsA 倒立 3 部分移動 1 回ひねり下り (E 難度) で、3 部分移動後 1 回ひねりの途中で中断した場合、dsA 倒立 3 部分移動 (D 難度) まで認定とする。

29. ブライアントタイプ (I-34 I-40) の倒立を経過する交差技は、以下の条件を満たすこととする。
  - ・ひねり戻しとならない。
  - ・上げる把手と下ろす把手が変わる。
  - ・両把手上の倒立で停滞しない。



I-34



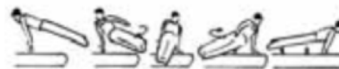
I-40

30. 横向き (開脚) 旋回 1 回ひねり移動 (2 回以内の旋回で他の位置へ移動し再び戻る) : E 難度 p77 II-29 (追加)



31. 両把手を挟んで (開脚) 旋回 1 回ひねり (2 回以内の旋回で) : F 難度 p77 II-30 (技番号の変更 p77 II-29を削除)

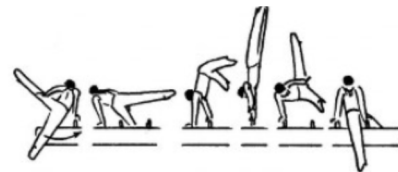
32. 縦向き 1/3 移動ひねり : B 難度 p80 III-26 (追加)



33. 縦向き (1/2 or 2/3) 前 (後ろ) 移動ひねり : C 難度 p80 III-27 (追加)



34. 正面（背面）横移動ひねり、背面（正面）横移動ひねり（馬端～馬端）：E難度 p81 III-29  
 （技番号の変更 III-28とIII-34 がIII-29 の同一枠に統合 p81 III-28、p81 III-34を削除）
35. 縦向き1/3 前移動1/4 ひねり：B 難度 p80 III-32（技番号の変更 p82 III-50を削除）  
 縦向き1/3 後ろ移動1/4 ひねり：B 難度
36. 正交差ひねり倒立横移動しながらひねり開脚支持（ステパンヤン）：C 難度



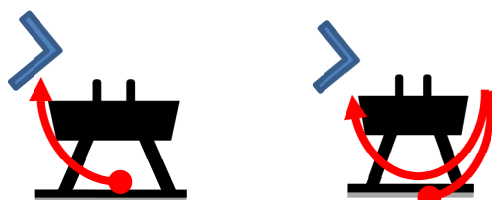
37. 縦向き 1/3 前移動直ちに 2/3 縦向き移動ひねり（ニンレイズ）：D 難度  
 ＊第 11-2 条 2 i)項、縦向き 3/3 移動は一演技中 2 回までの条項に抵触



38. 下向き転向降り（V-01）⇒（開脚）旋回から下向き転向降り

## 2) 演技実施上の確認事項

1. 交差技以外の片足振動技においても大きさない実施は減点（-0.10、-0.30）。
2. とび交差技についても、高さの減点は交差技と同様に扱う。とび交差技および交差倒立技において、両脚で馬体を挟んだり、臀部がついた場合は、器械上への落下とする。
3. 片足振動技で開始する際の余分な予備振動は-0.30 の減点となる。半振動は認められる。



減点無し

-0.30

4. 倒立を経過する交差技は振動で実施されるべきであり、腰をまげて倒立位になるような捌きは、腰のまがり（-0.30）および力の使用（-0.30）と2つの項目で減点の対象となる。また、倒立で足を閉じない場合は、-0.30の減点となる。
5. 倒立位を経過する技で倒立への上昇局面で足先が下がった場合は、-0.50の減点となる。
6. 旋回や開脚旋回の大きさに欠ける減点については、E審判は身体が十分に伸びていない実施に対して演技全体の減点（-0.30、-0.50）として対応する。一技における腰のまがり技術欠点として減点される。
7. 縦向き移動技で移動した後の終末局面で向きが不正確な実施は減点の対象である。
8. 縦向き移動技の向きの逸脱や着手位置のずれは旋回（一部分移動）ごとに減点の対象である。
9. フロップ技は一技ごとに減点の対象である。
10. 旋回技において馬体に触れる（当たる）実施は毎回減点となる（触れる-0.10、ぶつかる-0.50）。

## □ つり輪

### 1) 難度認定の確認事項

1. 10cm厚の着地マットの使用は認められない（高等学校適用規則は除く）。
2. ジョナサン（屈身ヤマワキ）やヤマワキ（かかえ込み）で支持が見えた場合、難度は不認定と

なる（ジョナサンで支持が見える≠ホンマ+支持後ろ振り前に回りながら懸垂）。

3. 支持後ろ振り、前に回りながら懸垂（I-07：A 難度）は、支持後ろ振りを示すべきで開脚前拳支持や水平支持から前に倒れて懸垂後ろ振りは難度を認定しない。
4. 振動からの力静止技は、融合した動きで静止技に持ち込まなければならない。輪の高さで前方宙返り十字懸垂（ホンマ十字懸垂）やけ上がり十字懸垂は、肩が上がりすぎてから(45°<)終末姿勢に持ち込んだ場合は2つの技として判定する。
5. グループⅢおよびⅣの技は直接3技まで連続することができる。4つ目以降はD 審判によって難度が認定されない。
6. グループⅢとⅣの技が4連続とならないためには、最低B 難度以上の振動技が必要である。ただし、け上がり脚前拳支持（I-56）、後方け上がり支持（I-62）、後方伸身支持回転倒立（II-02）は「B 難度以上の振動技」というこの条件から除外される。

- 例) ①振り上がり開脚水平支持・・・C（Ⅲ）  
②十字懸垂・・・・・・・・・・B（Ⅳ）  
③逆上がり・・・・・・・・・・A（Ⅰ）  
④脚前拳支持・・・・・・・・・・A（Ⅳ）  
⑤屈腕伸身力倒立・・・・・・・・B（Ⅳ）不認定

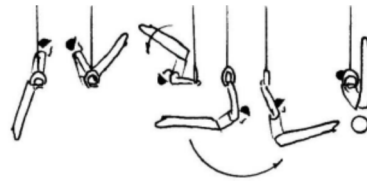
7. 中水平支持は、輪の高さで身体を水平で一直線に保持しなければならない。肩の大半が輪の上端より上にあった場合、水平支持と判定する。
8. アザリアンやヤン・ミンヨン（後方伸腕伸身逆上がり水平支持）は、伸身姿勢での後転が前提であり、腰のまがり実施減点となる。明らかに反動を利用した場合、グループⅢの技となる。
9. ピネダ（正面水平懸垂経過十字懸垂）、バブサー（正面水平懸垂経過中水平支持）は伸腕が前提であり肘のまがり実施減点となる。極端にまがる実施は難度を認定しない。また、正面水平懸垂（経過）は、正確な姿勢を表現し反動や振動を使わないで実施しなければならない。
10. ナカヤマについては、背面水平懸垂姿勢を経過し、ゆっくり捌かなければならない。明確に背面水平懸垂まで下ろさないものは単なる十字懸垂（B 難度）と判定する。また、反動を使うような捌きはD 難度として認定しない。
11. 脚前拳十字懸垂から伸腕伸身中水平支持や伸腕伸身十字倒立は、一度腰を伸ばしてから中水平支持や十字倒立に捌くことが前提である。腰をまげたまま肩を前に出す捌きは、屈身で判定する。
12. 水平支持（水平支持と開脚水平支持）は、一演技中2回まで価値を認定する。出現順に3回目は認められない。
13. 十字懸垂（十字懸垂、脚前拳十字懸垂、脚上拳十字懸垂）は、一演技中2回まで価値を認定する。出現順に3回目は認められない。

- 例) け上がり脚上拳十字懸垂・・・・・・・・D 難度  
ホンマ十字懸垂・・・・・・・・・・D 難度  
アザリアン・・・・・・・・・・不認定

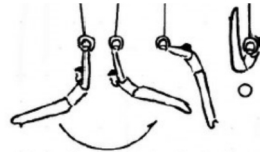
14. 前方屈身2回宙返り3/2（1回）ひねり下り：E 難度 p117 V-17（追加）
15. 前方かかえ込み2回宙返り3/2（1回）ひねり下り：D 難度（p117 V-10 追加）
16. 背面水平懸垂から引き上げ水平支持（2秒 ザネッティ）：F 難度（IV-72 と同一技番号）  
\*背面水平懸垂で静止が求められる。



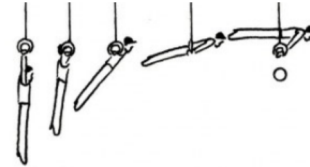
17. リーニン 2 直接脚上挙十字懸垂 (2 秒 ツカハラ) : E 難度 (Ⅲ)



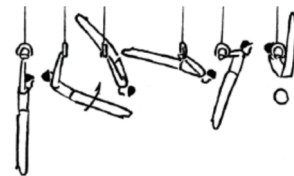
18. 後ろ振り上がり脚上挙十字懸垂 (2 秒 カトウ) : D 難度 (Ⅲ)



19. 懸垂から伸腕伸身水平支持 (2 秒 バランディン 3) : E 難度 (Ⅳ-53)

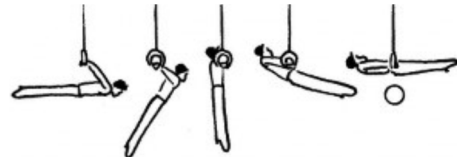


20. 伸腕伸身逆上がり脚上挙十字懸垂 (2 秒 タイ) : E 難度 (Ⅳ)



21. 背面水平懸垂経過伸腕伸身引き上げ上向き中水平支持 (2 秒 ザフラン) : F 難度 (Ⅳ)

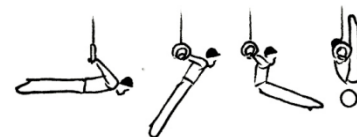
\* 技の過程でいかなる部分においても支持局面がみられた場合は、不認定で減点の対象となる。



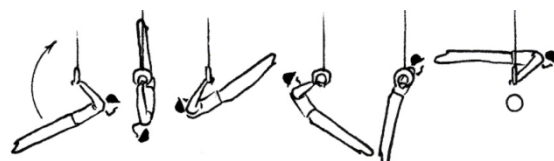
22. 採点規則 p100 屈身 (伸身) 逆上がり支持 (I-73) の挿図を差し換える。



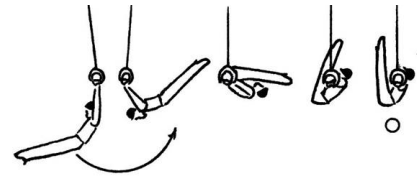
23. 背面水平経過脚上挙十字懸垂 (2 秒 グ・キュウ・チャン) : E 難度 (Ⅳ)



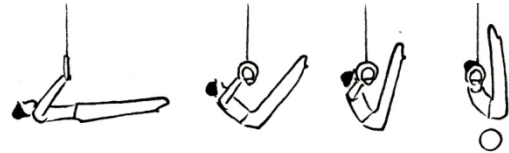
24. ゆっくりと前方伸腕伸身支持回転十字懸垂経過水平支持 (2 秒 グ・キュウ・チャン) : D 難度 (Ⅳ)



25. 輪の高さで前方宙返り直接脚上挙十字懸垂 (2秒 タナカ) : E 難度 (Ⅲ)



26. 伸腕伸身正面水平懸垂経過脚上挙十字懸垂 (2秒 ツカハラ) : E 難度 (Ⅲ)



2) 演技実施上の確認事項

1. 輪 (ケーブル) の揺れやゆがみは、1 技毎に $-0.10$  の減点となる。
2. 後方車輪 (ほん転逆上がり) 倒立経過において、腕が完全に揃っていない捌きや倒立位を経過していない場合の減点 ( $-0.10$ 、 $-0.30$ )。
3. ヤマワキやジョナサンで回転速度が遅い、または大きさが無い場合の減点 ( $-0.10$ 、 $-0.30$ )。
4. ヤマワキやジョナサンの回転途中で支持がみられた場合 (止まりかけて前ロールをするような捌き) の減点 ( $-0.50$ )。
5. 十字倒立で、頭頂部が輪よりも高いような実施の減点 ( $-0.50$ )。
6. 十字倒立で反った捌きに対する減点 ( $-0.10$ )。
7. 中水平支持や開脚水平支持で、肩が静止していても足先が揺れていたり、全体的にジワジワと動いているような実施では静止は認められず、全く静止していない減点 ( $-0.50$ ) に抵触する。
8. 屈腕伸身力倒立で振動を使った場合の減点 ( $-0.10$ 、 $-0.30$ )。
9. 伸腕屈身力倒立で肘がまがった場合、腕のまがりの減点、( $-0.10$ 、 $-0.30$ ) とロープに触れる減点 ( $-0.30$ ) が考えられる。
10. 脚上挙支持や脚上挙十字懸垂では、上半身と脚部に開きがあるような捌きは柔軟性に欠ける減点の対象となる ( $-0.10$ 、 $-0.30$ )。また、脚部は垂直でなければならない。
11. 逆懸垂姿勢での 2 秒以上の静止を減点対象とする (毎回 $-0.10$ )。
12. 十字懸垂から逆懸垂になる際・肘のまがりは減点の対象となる。
13. 演技開始時の肘をまげて逆懸垂へ持ち込む捌きは減点の対象となる。
14. 演技開始の懸垂で正しい姿勢から逸脱 (肩転位や輪を開いた状態) が見られる場合は、減点の対象とする。

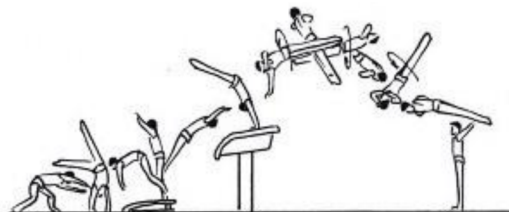
□ 跳馬

1) 難度および演技実施上の確認事項

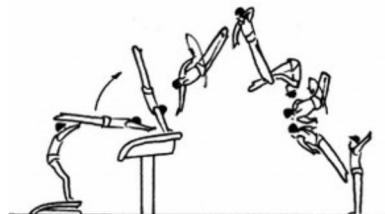
1. 種目別予選及び決勝において、得点の算出方法は第一跳越と第二跳越の平均を得点とする。
2. 高さ不足 (上昇局面のみられない実施) は以下の基準とする。
  - ① 減点なし=感動する程の高さ
  - ② 小欠点=浮いたと感じる程度
  - ③ 中欠点=浮きがみられない
  - ④ 大欠点=低いと感じる
3. ロペスやローチェであっても準備局面がみられない着地は減点となる ( $-0.10$ 、 $-0.30$ )。
4. 着地位置が低い実施は減点の対象である。
5. 着地一歩の踏み出しで、肩幅以上は中欠点である。



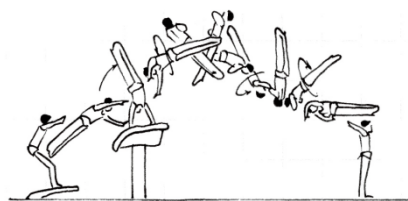
6. 着地が止まっても脚が開いたままやずれている場合は減点の対象である。
7. 軸ぶれやひねり不足による横方向への一步は、さらなる減点の可能性はある。
8. 伸身コルチェンコとび3回ひねり：6.0（シライ/キム・ヒフン #326）



9. 前転とび1回ひねり前方屈身宙返りひねり：5.2（アリカン #127）



10. 伸身カサマツとび5/2ひねり：6.4（#232）  
\*発表時に転倒したため、選手名はつかなかった。

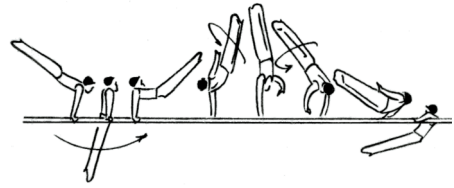


## □ 平行棒

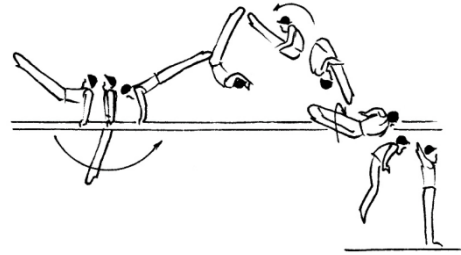
### 1) 難度認定の確認事項

1. 屈身バーレは、最初の後方宙返りから明確な屈身姿勢を示さなければならない。懸垂から宙返りになる際に膝のまがるものや屈身の不明確な実施（屈身になるのが遅い）は、かかえ込みと判定する。
2. 棒下宙返りひねり倒立において単棒上で明らかな停止をするような実施は、難度不認定とする。
3. 棒下宙返りひねり倒立で倒立の角度が低い実施（45°未満）をした場合、明らかな過失として難度不認定とし、棒下振り出しひねり支持（C 難度）としては判定しない。棒下振り出しひねり支持を実施する場合は、意図を明確に表現しなければならない。
4. 棒下宙返り倒立で肘がまがっても上昇運動に停滞がなければ難度を認定する。しかし、上昇中に停滞する実施や肩が一度下がるような実施は難度不認定となる。
5. シャルロ（棒下宙返り単棒縦向き倒立）：E 難度（1秒以上の静止）  
ピアスキー（後方車輪単棒縦向き倒立）：D 難度（1秒以上の静止）  
静止が1秒未満でも静止が認められた場合、難度を認定する。  
静止することが不可能な瞬時倒立では難度不認定となる。
6. 開脚抜き倒立技（チップルト等）で脚がバーにのった場合、難度不認定となる（器械上への落下）。また、開脚支持で明らかに停止する実施や上昇時に足先が一端下がり再び上げた場合、難度不認定となる。
7. 懸垂前振り上がり開脚抜き、伸身かつ水平位で懸垂：E 難度（III-05：バブサー）  
\* この技の後に連続された技は独立した難度を有する。後方車輪やモイであればE+C、バーレであればE+D等

8. ディアミドフひねり腕支持：C難度（I-15 サラザール）  
 ＊ 2003年世界選手権にてManuel SALAZAR（MEX）が発表

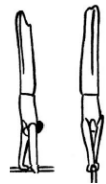


9. 前方屈身2回宙返りひねり下り：G難度（V アリカン）



## 2)演技実施上の確認事項

1. 振動から倒立位を経過する技は、15°未満の角度逸脱であっても減点（-0.10）となる。
2. 静止技として難度が認定されるためには2秒保持しなくてはならない。  
 脚前拳支持や後ろ振り倒立で2秒静止がない場合の減点（-0.30）。
3. 支持から腕支持前方ローリングをした場合の減点（-0.30）。
4. モリスエやバーレの高さ不足の減点（-0.10、-0.30）。
5. モリスエやバーレは浮きの表現とともに、腕支持になる前に身体や膝をよく伸ばさなければならない。  
 宙返りでかかえ込んだまま腕支持になった場合の減点（-0.10、-0.30）。  
 回転の途中でぶつかるように腕支持になる減点（-0.50）。
6. モリスエやバーレでバーを持った瞬間の姿勢不良の減点。
7. バーレ、モイ、車輪系の技で足先がマットに触れた場合（-0.10）、マットに明らかにぶつかった場合（-0.50）の減点となる。
8. バーレや宙返り系の技の終末局面において、バーを正確に握らない、または遅い握り、上腕部のみで支持しながら前振りになるような捌きに対する減点（-0.30）。
9. バブサーは、懸垂時に身体が伸身かつ水平でなければならない。  
 水平位からの角度逸脱の減点は、15°まで-0.10 30°まで-0.30
10. 棒下宙返り倒立系の技は伸腕での実施が前提である。肘がわずかにゆるむものは減点となる。  
 肘がまがった場合の減点（-0.10、-0.30）。  
 肘が深くまがった場合の減点（-0.50）。
11. シャルロやピアスキーは、単棒倒立で1秒静止が必要となる。  
 静止時間（1秒未満）：-0.30 瞬時単棒縦向き倒立：-0.50（難度不認定）
12. シャルロやピアスキーで縦向き単棒倒立で正対を示さない場合、縦向きの角度の逸脱も減点の対象とする（-0.10、-0.30）。握り手を前後にずらしたことによるわずかなゆがみ（右図参照）は減点の対象とはならない。身体の向きの逸脱は減点の対象となる。過度の逸脱は難度不認定となる。
13. 単棒横向き前方浮腰上がり脚前拳支持経過横向き倒立で、足先がバーに触れた場合の減点（-0.10）。
14. チップルトで脚がバーにのった場合、器械上への落下となり減点（-1.00）。
15. 終末技で着地を止めても着地前に身体を伸ばす局面がみられない減点（-0.10）。
16. ウォームアップ時間は、個人一人に対し50秒、チームに対し50秒×人数分が与えられる。そ



れらにはバーの調整やマグネシウムをめぐる時間も含まれる（終了のコールと同時に始めた運動は認められる）。時間オーバーした場合は決定点から 0.30 の減点（ニュートラルディダクション：ND）となる。

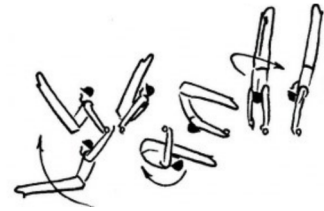
計時審判のコールはアップ開始の「スタート」、個人の場合は「40 秒」、「50 秒（終了）」、チームの場合は「30 秒前」、「10 秒前」、「終了」とする。運営上可能であればタイマーを設置する。

## □ 鉄 棒

### 1) 難度認定上の確認事項

1. 片手懸垂になる技はバーの下を最大 2 回まで通過することが認められる。
2. ひねりを伴う技は握り方が違う同じ技（例：リバルコと後方とび車輪 3/2 ひねり片大逆手）を行うことはできない。
3. 手放し技の認定は明確な懸垂姿勢を示した場合に限られる。懸垂直後の前(後ろ)振りで落下した場合、不認定となる。
4. 伸身トカチェフは、明らかな腰のまがり（90°）が見えた場合 C 難度とする。
5. ヤマワキ（II-10）は、上昇の仕方、腰のまがり具合、下向き転向の度合いを総合的に判断する。明らかな腰のまがりとは下向き転向が見えた場合、ポローニン（B 難度）と判定する。
6. モズニク等で、懸垂後に後ろ振り倒立または手放し技へ連続出来なかった場合や腕を交差しただけの実施はトカチェフ（伸身または開脚）と判定する。
7. 屈身回転やとび車輪でひねりを伴う技において、水平より高い位置で技を完了しない捌きは難度不認定になる。
8. 屈身回転やひねりを伴う技の途中での停滞、とびひねり技でとびが見られない握り換えは難度を分割する。
9. 肩を半転位した状態での逆手背面車輪は大逆手車輪（B 難度）と判定する。
10. 大逆手車輪（B 難度）は、以下のような連続で大逆手車輪（B 難度）を認定することができる。  
例) アドラー（C）～大逆手振り上がり（大逆手車輪：B）～大逆手エンドー（C）  
リバルコ（D）～大逆手振り上がり（大逆手車輪：B）～大逆手エンドー（C）
11. 大逆手車輪（B 難度）は、以下のような連続では認定されない。  
例) アドラー（C）～大逆手振り上がり逆手持ち換え（難度なし）  
リバルコ（D）～大逆手振り上がり逆手持ち換え（難度なし）
12. 15-2 条 2-3-7. のアドラー系は 2 回まで実施できるという条項において以下のように判定する。  
例) ①アドラー・・・45° 未満で不認定  
②アドラーひねり・・・D 難度  
③アドラー1 回ひねり・・・3 回目でも不認定（E 審判：-0.30）  
例) ①アドラー（落下による不認定）  
②アドラー・・・C 難度  
③アドラーひねり・・・D 難度
13. 大逆手エンドーの成立は、終末局面である倒立位から 45° 以内や早めに逆手に持ち換えて前方車輪につながるような捌きであれば難度認定される。また、倒立に上がらないで順手に持ち換えて後方車輪に繋がるような実施では不認定となる。
14. 伸身で行う技は全経過伸身姿勢を示さなければならず、途中で屈身やかかえ込み姿勢がみられた場合、低い難度で判定する。後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下りにおいて、後半に膝をまげるような実施は、かかえ込みと判定し D 難度とする。
15. 開脚モズニク（リンチ）：D 難度 p181 II-22（p181 II-17 の括弧内から移動）
16. シャオ・ルイチ：D 難度 p183 II-46（p181 II-22 から技番号の変更）

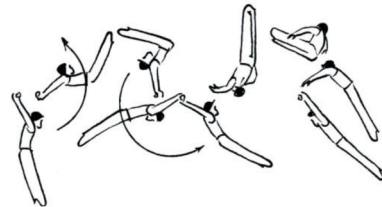
17. シュタルダーとび1 回ひねり大逆手：D難度 p189 III-46 (p189 III-40から技番号の変更)
18. シュタルダーとび3/2 ひねり片大逆手：D難度 p189 III-40 (p189 III-46 から技番号の変更)
19. 手背面懸垂振り上がり後方浮腰回転倒立ひねり大逆手：D 難度 (IV-46 リホヴィツキー)



20. 屈身ゲイロードひねり懸垂：F 難度 (II-60 マラス)  
\*2007年ヨーロッパ選手権にて Vlasios Maras (GRE) が発表



21. 順手背面懸垂からギンガー：C 難度 (II-69 サプロネンコ、ギンガーと同一枠)  
\*1997年世界選手権にて Yevgeny Sapronenko (LAT) が発表



## 2) 演技実施上の確認事項

1. 車輪での単純な横への手のずらし (片手も含め) は減点 (-0.10)。
2. ひねりを伴う技はひねり終わってバーを握った時点の角度で判断をする。
3. ひねりが完了し片手ずつ握る実施では減点はない。不完全なひねりで片手ずつ握るような実施は、減点の対象となる (-0.10、-0.30)。
4. 手放し技は、バーを握る前に身体をよく伸ばさなければならない。身体の伸ばしが不十分な捌きや、膝のまがった実施、身体が歪んだまま懸垂になるものは減点となる。
5. 屈身回転ひねり系の技において、ひねりの前に屈身倒立で停滞するような実施は減点であり、そのうえ分割した難度認定の可能性もある。また、屈身回転倒立の上昇中にひねりが始まらない場合や、片大逆手になる技で高い位置でバーを握ってもひねりが完了していない実施も減点の対象となる。
6. 終末技や手放し技の前の車輪での膝まがりは減点となる。
7. 終末技や手放し技の前の車輪の倒立位からの外れに対する減点はない。
8. ヤマワキ (II-10) は、伸身で身体が垂直にバーを越えなければならない。バーを越える際の過度の腰のまがりや不完全な実施は減点の対象となる。

## 7. 2015 年度内規

全ての国内競技会に適用する。

- ◎ プロテクターが破損した場合や、負傷により出血した場合に限り、30 秒を超えて演技の再開を認める。これらは、あくまでもプロテクターの交換や止血のための措置に限る。

以下に示す競技会以外の大会で適用する。

- ・ 第 69 回全日本体操競技選手権大会（個人総合選手権、種目別選手権、団体選手権）
  - ・ 第 54 回 NHK 杯体操
  - ・ 2015 全日本ジュニア体操競技選手権大会（1 部）
  - ・ 第 69 回全日本学生体操競技選手権大会
  - ・ 2015 全日本シニア体操競技選手権大会（1 部）
- ① 終末技グループの要求難度について
- ・ A 難度の終末技 +0.10
  - ・ B 難度の終末技 +0.20
- ② 下記の宙返り下りは A 難度とする
- ・ つり輪、平行棒、鉄棒の前方・後方（かかえ込み・屈身・伸身）宙返り下り

その他

情報 21 号では巻末に競技会でのマナーについて記載させていただきました。多くの選手や監督、審判の方々が注意されている様子がうかがえました。リオデジャネイロ五輪や東京五輪での選手の活躍を目指すためにも関係者一丸となって些細なところから改善されることを期待したく、この項に記載しました。来年度も引き続きお願いいたします。

- ① 着地の際のガッツポーズ
- ② 平行棒の調整とマグネシウムの使用方法
- ③ ローテーション時の整列
- ④ 採点間や待機時（ウォームアップ時以外）のマット上での練習
- ⑤ 頭髪や服装、**タトゥー**
- ⑥ 携帯機器の使用

①は、着地をした後、両手を拳上しポーズをとる前にガッツポーズをする選手を見受けます。自己の演技に高揚しガッツポーズをとることは構いませんが演技の終了を示すポーズと礼をするまで演技の一部であることを認識していただきたいと思います。②は、跳馬の演技終了後バッグを持ちチームの大半の選手が平行棒まで移動し器具の調整を始めることや、選手が着地のポーズをとっている最中に次の選手やコーチがマット上に上がって準備を始めるケースがありました。**器械の調整は 2 名程度でお願いします。**③は、ローテーションで早く移動したチーム内の選手が整列をして待つことなく器具やプロテクターの調整をしている場面がありました。また、平行棒の準備の際マグネシウムをばら撒くように使いマットを白く汚し霧吹きや雑巾も散在しています。④は、狭い競技会場などで選手席がマットに近い場合、マット上で柔軟運動や倒立をする選手がいました。⑤は、国際大会でタトゥーを入れている外国選手が見受けられました。文化の違いはあるにせよ体操競技は美を競うスポーツです。頭髪や身だしなみから日本の選手は美しいと評されることを期待します。⑥は、携帯機器の使用はアリーナ内での使用は禁止されています。国内大会におきましても、器械の周りは五輪や世界大会におけるポディウムと同じと考えています。

また、競技会場や更衣室内でのゴミの放置や使用したテーピングの後始末など様々な意見を耳にすることがあります。選手、コーチ、審判員は、競技会場内外における自身の行動にもご注意いただきたいと存じます。

## 8. 終わりに

審判委員会  
男子体操競技審判本部  
本部長 後藤 洋一

2014 世界選手権南寧大会では、男子団体決勝競技において、0.10 という僅差でライバル中国に敗れてしまいました。ゆか、あん馬の前半種目で得点を稼ぎ後半種目を耐え抜く、D スコアの差を E スコアの実施で挽回するという展開を想定し準備をしておりましたが、ほんのわずか何かは足りなかったのではないのでしょうか。2015 年は体操ニッポンの英知を振り絞りこの足りない何かを日本全体で埋めていくことが課題となるでしょう。一方、個人では内村航平選手が世界選手権 5 連覇を達成するとともに田中佑典選手も表彰台に上がることが出来ました。個人総合で日本選手が 2 名表彰台に上がったことは 3 大会連続のことです。種目別決勝では、白井健三選手がゆかで内村航平選手が鉄棒で銀メダル、加藤凌平選手が平行棒で銅メダルと合計 6 個のメダル獲得は男子競技では最多獲得数でありました。

9 月に開催されました第 17 回アジア競技大会では、大会史上初の団体優勝に輝きました。また、個人総合では神本雄也選手が 1974 年以来の優勝、山本雅賢選手が銀メダルと合計 9 個のメダルを獲得しました。長年にわたって結果が出なかったアジア競技大会での活躍は今後の大きな力となることでしょう。出場した選手はもとより、コーチやトレーナーの方々を含め派遣された選手団に敬意を表したいと存じます。

今年度も審判員の皆様には採点技術の更なる研鑽をお願いします。日本国内で 2020 年東京五輪に向けていろいろなことがスタートしています。審判委員会では東京五輪対策の一つとして次期サイクルから 1 種審判員の 카테고리制度の導入と日本代表選考競技会でコーチの 1 種審判資格保有義務化が提案し承認されました。これらは審判技術の一層の向上と現場への新しい情報の入手と活用が期待されます。情報につきましては国内に向けて発表したこの情報を十分に掌握され選手の評価にあたっていただきたくお願いします。また、様々な通信機器による SNS (ツイッターやフェイスブックなど) によって様々な情報が氾濫しています。選手に関することはもとより規則に関する情報など公的ではない内容も見受けられます。そのような情報に惑わされることないようにするとともに発信源にならないようご配慮いただきたく存じます。

2014 年は第 18 回東京オリンピックから 50 周年という節目の年でありました。当時選手であった方々が参集したイベントで日本選手団の主将を務められた小野喬氏が当時を振り返り、“ローマで勝って東京で連覇”を合言葉に苦しい合宿練習を乗り切ったと話されていました。50 年後の私たちも“リオで勝って東京で連覇”を達成できるよう小さなことから一つひとつ積み重ねていかなければならないでしょう。2015 年はその第一歩となることを期待します。

おわり